新[illegible]文学史 5 近世II 責任編集／久松潔 [illegible]

新版日本文学史近世II

久松潜一
五味智英
池田亀鑑
秋山虔
市古貞次
麻生磯次
吉田精一

至文堂刊

序

文学史の研究は、文学研究における到達点であり、これによって全体と有機的に統一づけることができる。日本文学の研究においても、明治以後はそれ以前の注釈を中心としたと異なって、文学史研究が中心的位置を占めてきたが、なお今後にまつところが多い。私自らも日本文学史の研究を一つの課題として多年考察を続けており、これに関する一、二の述作をまとめたことがあるが、個人の研究には限界がある。ことに規模の大きい文学史においては、それぞれの時代の専門分野にわかれてくるので、共同的に扱うことが必要となるのである。

こういう考えのもとに同学とともに先年規模の大きい日本文学史を企画し、各時代文学史をそれぞれ専門とされている方々にこうて執筆していただいた。全体を一つの史観によって貫くというよりも、それぞれの分野における最も正確な叙述によって文学史の基礎をしっかり立てることが目標であった。そして、多数の人が書いた場合に、相互に有機的な連絡がなく統一のなくなることのないために、私のほかに五味智英・池田亀鑑・市古貞次・麻生磯次・吉田精一の五氏がそれぞれ専門とする時代を分担されて、執筆者とも十分打ち合わせをし、各項が講座風な配列と叙述に終らないように有機的な調整をした。そして、執筆者の深い協力と編集の五氏の献身的な努力とによって、立派な内容の上に全体に統一のとれた文学史となることができたのである。

それから一〇年が過ぎた時、顧みると文学史上の新資料・新見解の現れた点も多く、学界の水準を示すためには増補訂正をなすべき点も生じてきたので、執筆された方々に再びこうて増補訂正を行い、新しく発表された参考文献をも加えた。近代編ではその後の文学的事象を書き加えていただき、年表も数年間の記事を補った。したがって索引を

新たに作成し、口絵写真なども新しくした。ただこの間に、執筆者のうちで池田亀鑑・風巻景次郎・西下経一・秋本吉郎・田辺幸雄・吉原敏雄・佐佐木治綱・杉浦正一郎・宇佐美喜三八・片岡良一氏らが世を去られた。そのために中古編の編集に秋山虔氏を委嘱するとともに、各項目についてもそれぞれ新しく執筆者を依頼して増補訂正を行った。かくして面目を一新した日本文学史六巻が完成したのは昭和三十九年のころであった。

それからさらに、五、六年は過ぎたが、増補訂正版では、増補した部が本文とは別々になっているので、使用の上でも体裁の上でも不便なことが少なくなかった。そこでこのたびは執筆者にこうて増補の部分をも本文に組み入れ、また全面的に書きかえたりして、新版として世に送ることになった。近世・近代はもともと量も多かった上に、近代では書き加える部分も多く、一層量も大きくなったので二冊にわけることにした。また総説年表編の年表も書き加えられ、量も多くなるので、年表編と総説編を別々にすることにした。

このたびの新版では、参考文献をまとめて後に加えることにした。その他、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。ただ引用文はもとのままである。

日本文学史の研究は、今後も進展してやまない。本書にしても、文学史の一つの段階を表すものではあろうが、これによって日本文学史研究の現在における大きな礎石としての役割を果すことはできるであろう。

終りに、この日本文学史のためにそれぞれすぐれた研究成果にもとづいて執筆され、再三にわたって増補もしくは書き改めて下さった方々の協力を心から感謝する。ただ増補訂正版からこのたびの新訂版に至る間に窪田敏夫・田崎治泰氏らが世を去られたためもあって新しく執筆を中西進・犬養廉・島田良二・福田秀一・長谷川強・恩田逸夫・片岡懋氏らに委嘱した。片桐顕智氏は書き改めを完成されたのちに世を去られた。この日本文学史の形成と発展にも、種々の世の移り変りが現れていることを今更に感ずるのである。

さらにまた、この文学史をよりよくするために不断に協力を惜しまれなかった佐藤正叟氏も世を去られて、新たに佐藤泰三氏によってことが進められたことを付記して、感謝の意を表したい。

昭和四十六年四月

久松潜一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

後期……四八三

第一章　歌舞伎……四八六

一　南北まで……四八六

1　十八世紀後半期……四八七

概観（四八七）―三都の歌舞伎の消長（四八七）―脚色の進歩（四九三）―脚本の地位の向上（四九五）―舞台の整備（四九五）―豪越一三治（四九七）―金井三笑（四九八）―桜田治助（四九九）―並木正三（五〇一）―奈河亀輔（五〇二）―並木五瓶（五〇三）

2　十九世紀前期……五〇四

退廃的気分（五〇四）―生世話の成立（五〇五）―形式美の確立（五〇六）―脚本の重視（五〇七）―鶴屋南北（五〇八）

二　黙阿弥を中心に……五一一

1　概観……五一一

衰退の理由（五一一）―創作態度（五一四）―おもな俳優（五一四）

2　先輩作者……五一五

三升屋二三治（五一五）―三世並木五瓶（五一六）―五世鶴屋南北（五一六）―宝田寿助（五一七）―四世中村重助（五一七）

3 上方作者……五一八
二世金沢竜玉（五一八）―西沢一鳳（五一九）
4 治助と如皐……五一九
三世桜田治助（五一九）―三世瀬川如皐（五二一）
5 二世河竹新七（黙阿弥）……五二三
経歴と作品（五二三）―白浪物の内容（五二六）―その他の世話物（五二九）―浄瑠璃所作事（五三一）

第二章 俳諧……五三三
一 蕉風復興への動勢……五三三
中興期俳諧序説（五三三）―五色墨と伊勢派（五三五）―仮名詩の流行と蕪村の自由詩（五三九）―復古思潮と芭蕉五十回忌（五四四）
二 中興俳壇の諸家……五四七
離俗の俳諧――蕪村・太祇・召波（五四七）―東海の復古運動――樗良と暁台（五五二）―闌更・麦水と白雄の復古先陣論争（五五九）―片歌論争その他――天下ひと手の風（五六三）―安永年間の夜半亭の盛況（五六八）―暁台の天下統一運動（五七三）
三 文化・文政以後……五七五
1 文化文政期の俳諧……五七五
概観（五七五）―鈴木道彦（五八〇）―井上士朗（五八二）―夏目成美（五八四）―大伴大江丸（五八七）―小林一茶（五八九）―岩間乙二（五九八）
2 天保以降の俳諧……六〇〇
概観（六〇〇）―田川鳳朗（六〇三）―成田蒼虬（六〇五）―桜井梅室（六〇六）

第三章　川柳と狂歌……六〇八
一　川柳……六〇八
近世後期の雑俳（六〇八）―川柳の名目（六〇九）―柄井川柳（六一一）―万句合（六一三）―万句合の由来（六一六）―柳多留（六一八）―川柳選の句集（六二〇）―武玉川（六二二）―高点付句集（六二五）―川柳の特性（六二七）―代々の川柳（六三三）―上方雑俳と川柳（六三四）―地方の雑俳（六三六）
二　狂歌……六三八
明和十五番狂歌合まで（六三八）―狂詩の影響（六三九）―内山賀邸の門流（六四〇）―狂歌の普及（六四一）―狂歌若葉集（六四二）―万載狂歌集（六四三）―狂歌流行の原因（六四三）―落首（六四七）―徳和歌後万載集（六四五）―浮世絵との関係（六四六）―四方赤良（六四七）―唐衣橘洲（六四九）―朱楽菅江（六五〇）―平秩東作（六五一）―元木網（六五一）―手柄岡持（六五二）―宿屋飯盛（六五五）―鹿津部真顔（六五六）
第四章　国学……六五八
一　賀茂真淵……六五八
伝記（六五八）―学問の系譜（六五九）―学問の主眼（六五九）―著書（六六〇）―荷田在満（六六一）
二　真淵の学統……六六二
門人（六六二）
三　本居宣長……六六八
伝記（六六八）―真淵との対面（六六九）―古道論（六七〇）―著書（六七二）

四　宣長の学統……六七二
宣長の族統（六七二）―門人（六七三）―菅江真澄（六七七）
五　篤胤と信友……六七九
篤胤の伝記（六七九）―業績（六八一）―伴信友（六八二）―橘守部（六八二）
六　幕末の国学……六八三
第五章　和歌と漢詩文……六八八
一　和　歌……六八八
1　京都派の台頭……六八八
平安の四天王（六八八）―蘆庵の略歴（六八九）―蘆庵の歌論（六八九）―蘆庵の歌（六九一）―蘆庵の交友と門人（六九二）―歌人としての秋成（六九二）―秋成の歌（六九三）
2　香川景樹と桂園派歌人……六九四
景樹の略歴（六九四）―蘆庵との関係（六九五）―景樹の歌論（六九六）―景樹の歌（六九八）―桂園門の歌人（七〇〇）―直好と幸文（七〇一）
3　江戸派の流れ……七〇三
千蔭の門派（七〇四）―春海の門流（七〇五）―井上文雄（七〇七）
4　鈴屋派の歌人……七〇九
春庭・大平・篤胤・その他（七〇九）―加納諸平とその門流（七一五）
5　特異な歌人群像……七一七
良寛（七一八）―安藤野雁（七二二）―平賀元義（七二三）―大隈言道（七二六）―橘曙覧（七二九）

二　漢　詩　文……七三四
1　序　説……七三四
2　服部南郭と梁田蛻巌……七三四
　服部南郭（七三五）―梁田蛻巌（七三六）
3　頼山陽と梁川星巌……七三七
　頼山陽（七三七）―梁川星巌（七四〇）
4　狂詩と朝鮮使節との贈答……七四三
　狂詩の由来（七四三）―蜀山人（七四五）―朝鮮人との唱和（七四七）

第六章　江戸草紙（草双紙）……七五一

一　江戸草紙（草双紙）と行成表紙・赤小本・ひいな本……七五一
　草双紙の名称と内容（七五二）―純文学と大衆文学（七五三）―草双紙の特色と評価（七五四）―行成表紙（七五四）―絵と大衆文学（七五五）―江戸草紙（草双紙）の形態（表紙）（七五六）―江戸草紙の丁数（七五六）―赤小本・ひいな本と子供（七五七）

二　赤　本……七五七
　赤本の時代区分と胎生期（七五七）―初期の赤本（七五八）―「たゞとる山のほとゝぎす」の梗概（七五九）―国民童話の記録と流布（七六〇）―成人目当の赤本（七六〇）―中期の赤本と本格的形態（七六一）―二段形式の赤本（七六二）―玩具物（七六三）―演劇物（七六三）―代表作者（七六四）―末期の赤本（七六四）―書物形態分類表（七六五）―ひいな本十部（七六七）

三　黒本・青本……七六九
黒本（七六九）―青本（七七〇）―曲亭馬琴の説（七七〇）―黒本・青本のちがい（七七一）―黒本・青本の時代区分（七七一）―初期の黒本・青本（七七二）―成人物（七七三）―中期の黒本・青本（七七三）―特筆すべき内容の作品（七七四）―合巻形式の萌芽と風刺物（七七四）―歌舞伎との関係および趣向を競う態度（七七五）―敵討物その他（七七六）―代表作者（七七六）―戯作（七七七）―取材と広告用小説（七八〇）―末期の黒本・青本（七八一）―代表作者富川房信（七八二）―恋川春町の立場（七八四）―吟雪と春町の競争（七八五）―清満・清経・和祥・桂子（七八六）―画工春町（七八七）―出版部数と書林（七八八）
四　黄表紙……七九一
黄表紙の時代区分（七九一）―金々先生栄花夢の梗概（七九一）―初期作品と代表作者（七九二）―読者の成長（七九三）―三未来記（七九四）―中期の作品（七九四）―大悲千禄本の梗概（七九四）―江戸生艶気樺焼の梗概（七九五）―風刺物（七九六）―代表作者（七九七）―中期の後半と赤本復古（七九八）―代表作者（七九八）―黄表紙と洒落本・読本の関係（七九九）―末期の黄表紙と敵討物（七九九）―敵討義女英の梗概と敵討物流行の決定（八〇〇）―題材の変化（八〇一）―御条目（八〇一）―名作二十三部（八〇二）―黄表紙評判記（八〇二）―合巻への動き（八〇三）―黒本・青本・黄表紙の値段（八〇四）―江戸文化の普及（八〇五）―敵討物の影響（八〇五）―御民われ（八〇六）
五　合巻……八〇七
合巻の意義（八〇七）―合巻本・分冊本・新意匠本（八〇七）―摺付表紙・錦絵表

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

紙・袋・口絵（八〇八）―合巻の時代区分（八〇九）―読切合巻と合巻創作法（八一〇）―笠森娘錦之笈摺の梗概と新趣向（八一二）―代表作者（八一五）―合巻と読本の競争（八一六）―正本製と俳優の合巻創作（八一七）―合巻作者と読者の関係（八一七）―新形態の合巻と白浪物（八一九）―修紫田舎源氏（八二〇）―代表作者（八二一）―長編合巻時代（八二二）―代表作者（八二三）―明治合巻の区分とその概観（八二四）―明治初期の小説に中本型が選ばれる（八二五）―山東京山の開明調の作品（八二六）―明治合巻の模索（八二七）―明治合巻の先例と逍遙の立場（八二七）―前期の明治合巻（八二九）―青本の復活（八三一）―中期の明治合巻（八三二）―代表作品――「今常盤布施譚」（八三四）―政治物と翻訳物（八三八）―後期の明治合巻（八三九）―銅版合巻・銅版小本（八四〇）―明治合巻の末端と戯作者（八四二）

本……八四三

一　前期……八四三

読本の発生（八四三）―都賀庭鐘の作品（八四六）―雅文小説と建部綾足（八四八）―水滸伝翻案の流行（八五一）―上田秋成の読本（八五二）―前期読本の性格（八五八）

二　後期……八五八

江戸の読本（八五九）―山東京伝の読本（八六一）―京伝読本の特色（八六五）―曲亭馬琴の生涯（八六八）―馬琴の読本――前期（一）（八六九）―馬琴の読本――前期（二）（八七三）―馬琴の読本――後期（八七六）―馬琴読本の特色（八七七）―種彦・六樹園その他の作者（八八〇）―中形本読本（八八二）―後期上方読本の衰退（八八三）

第八章　洒落本……八八四
一　洒落本の発生……八八四
洒落本発生の基盤とその性格（八八四）―発生期洒落本の概観（八八六）
二　江戸洒落本の隆盛……八九〇
洒落本定型の成立と発展（八九〇）―安永・天明期の主要作者とその作品（八九四）
三　山東京伝の洒落本……九〇〇
山東京伝の生涯（九〇〇）―京伝の洒落本（九〇一）
四　末期洒落本とその変質……九〇六
寛政以後の作者・作品（九〇六）―末期洒落本の変質（九〇九）―通・うがちの文学からいき・人情の文学へ（九一一）
第九章　滑稽本……九一三
滑稽本の発生（九一三）―当世下手談義（九一六）―談義物の系列（九一九）―風来山人の滑稽本（九二三）―安永天明期の滑稽本（九二五）―十返舎一九（九三一）―東海道中膝栗毛（九三四）―式亭三馬（九三八）―浮世風呂と浮世床（九四〇）―三馬以後の滑稽本（九四三）
第十章　人情本……九四六
一　人情本の特質……九四六
洒落本から人情本へ（九四六）―情話風な傾向（九四七）―洒落本と人情本との比

較（九四八）―外形体裁上の区別（九四九）―人情本の名称（九五〇）―人情本の性格（九五一）

二　初期の人情本……九五二

人情本の発生（九五三）―二世楚満人（九五三）―明烏後正夢（九五五）―軒並娘八丈（九五七）―酒落本の転化（九五七）―鼻山人（九五八）―初期の諸作家（九五九）

三　後期の人情本……九六〇

曲山人（九六〇）―春色梅児誉美（九六一）―その他の春水の作品（九六二）―松亭金水（九六三）―その他の作家（九六三）―末期の人情本（九六四）―いき（九六四）

増補訂正……九六六

人情本の成立（九六六）―江戸紫（九六七）―二世楚満人と合作の問題（九六七）―春水と合作の問題（九六八）―天保の改革（九七〇）―鼻山人と曲山人（九七〇）―その他の問題（九七一）

参考文献……九七三

索引……九九〇

後　期

仮名草子や浮世草子は、大体京坂を中心に栄えたのであるが、安永・天明ごろになると、それも衰えて文壇の中心は江戸に移った。江戸では早くから幼稚な絵草子が行われていた。赤本・黒本・黄表紙などがそれであって、後に発生した合巻とあわせて草双紙と呼ばれた。

赤本や黒本は婦女子を相手にしたものであったが、黄表紙になってはじめて大人の読物になった。黄表紙の妙味は軽妙な洒落を試み、奇警な観察を下す点にあった。黄表紙と並んで洒落本が行われた。洒落本も初期の作は漢学者の手すさびに成ったもので、高雅と卑俗の反発をねらっており、全盛期の洒落本には精細な写実も見られるが、通と半可通の対比に滑稽味を求めた作が多い。川柳は江戸を舞台にして繁栄し、狂歌も江戸に移ってから天明の黄金時代を現出した。いずれも滑稽を主眼とする文学であることはいうまでもない。

このように江戸に新たに勃興した文芸は、穿ちや風刺をもっぱらにし、軽妙な江戸人の好尚に応ずるものであった。それは元禄の写実文学とはかなり性質を異にするものであって、江戸の社会と文化が生んだ異色のある文芸であるといえるのである。社会組織が整備し、生活が固定化するに伴い、平板を強いられた人々は、生活のはけ口を文芸に求めるというようになった。黄表紙や洒落本の作者には、相当の地位や学識のあるものが少なくなかった。彼らは窮屈な世界から脱け出し、解放の歓喜にひたろうとしたのであるが、現実がこれを許さなかったために、文芸の世界に逃避して、歪んだ視点から現実を解剖した。そこにおびただしい風刺や皮肉や穿ちが発生し、それが文学をにぎや

かにしたのである。

しかしこういう民衆的な意欲も、寛政の綱紀粛正によって制圧された。朋誠堂喜三二や山東京伝が処罰をうけ、黄表紙も従来の風刺的なものから教訓風なものに方向を転じ、遊里の内情の暴露に専念した洒落本も、物語風な真面目なものに変っていった。これに代って文化・文政ごろを中心に栄えたのは、勧善懲悪主義を標榜する読本と、黄表紙の変貌した合巻の草双紙であった。一方では洒落本から分化した滑稽本と人情本とが、江戸末期にかけて流行したのである。

文化・文政から天保にかけて、江戸文化は爛熟の極点に達した。社会の機構は形式の上では整備されたが、一体に元禄時代に比べると、消極的でもあり守成的でもあった。当路者も奢侈の矯正ということだけに頭をなやまし、創造的な方策に出ることはなかった。元禄時代に見られたような、いきいきとした躍進の気運は動いていなかったのである。

馬琴の読本はこういう時代の潮流に乗じて現れたものであって、その時代の思想を最もよく代弁したものであった。その作品は編集的であって創作的ではなかった。量的であって質的ではなかった。道義的であるというのも表面だけであって、人心は既に倦怠し、弛緩していた。合巻の挿絵や人情本の場面などには、かなり退廃的なものがあった。歌舞伎の舞台面などにも残忍な殺し場や、猥褻な濡れ場が多く見られた。末期の滑稽本に現れる人物は、どれもこれも非生産的な人間ばかりである。生活に対する強い欲求もなく、はつらつたる意気と至純な感情を失っていた。趣味が低く、性格が因循で、姑息偸安を貪るような人物である。

しかし当時の人々は円転滑脱な社交生活の間に安住していたように見える。その滑稽は口先だけのものであり、その笑いは表面的なものであったが、その間に軽妙怜悧な時代の人々の面影がのぞいている。朗らかに澄んだ笑いは乏

しいが、いかにもにぎやかな笑いがくりひろげられている。そういう笑いの生活を通して、問題を切実に感じないですむだけの生活の余裕も想像される。その時代の人々は現代人には味わえないような幸福に満足していたといえるかもしれない。とにかくこのようにして他の時代に類例を見ない独特の文学が生み出されたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com